

名古屋城の史料はどこにある？

名古屋城の歴史を明らかにするには、文献・美術品・出土遺物など、名古屋城に関連する多様な史料を調査する必要があります。そのため本センターには、文献史学・美術史学・考古学など、それぞれの史料に対応する分野の学芸員が所属しています。

このうち、美術史の分野では、名古屋城が所蔵する重要文化財・旧本丸御殿障壁画の調査や修復が進められています。また、考古学の分野では、城内の発掘調査や石垣カルテの作成が行われています。これらの分野では、名古屋城が所蔵する美術品や、城内から出土する遺構・遺物の調査研究が中心的な課題になるでしょう。

ところが、私が担当している古文書や古記録などの文献史料についてみると、名古屋城が所蔵する史料は全体のごく一部に過ぎません。では、史料はいったいどこにあるのでしょうか？



▲名古屋市蓬左文庫での調査風景

江戸時代の名古屋城は尾張徳川家の居城だったので、史料も尾張徳川家が持っているのでは？と思われるかもしれませんが、これは、半分は正解といえます。たしかに、尾張徳川家の旧蔵史料を受け継いだ徳川林政史研究所や名古屋市蓬左文庫には、江戸時代の名古屋城に関する文献や絵図が数多く伝わっているからです。

ところが、築城に関する史料に限れば、尾張徳川家に伝わった史料は決して多くありません。むしろそれらは熊本の細川家、高知の山内家など、西国の大名家に伝来した史料群のなかに多く残っています。名古屋城は徳川家康の命で、諸大名を動員して築かれたため、築城普請に関する史料も、動員された大名家のもとに残されたのです。

また、時代を下って明治以降になると、名古屋城は政府に引き渡され、陸軍や宮内省が所管しました。そのため、この時代の史料は、旧陸軍と旧宮内省の文書をそれぞれ引き継いだ、防衛省防衛研究所や宮内庁宮内公文書館に数多く残されています。

このように、名古屋城に関する文献史料は全国に分散しています。そのこと自体、名古屋城の長く奥深い歴史を反映したものといえるでしょう。

こうした全国に所在する文献史料の調査研究を進め、各地に蓄積された史料情報や研究成果を共有・発信することが、私たちの重要な仕事の一つであるといえます。

そのため開設初年度から、文献史料担当の学芸員は各地に出向いて調査を進めています。こうした調査の成果は、本誌のなかでも随時お伝えしていきたいと思えます。ぜひご期待ください。

(学芸員 木村慎平)



▲焼失前の天守

名古屋城 調査研究センターだより

2020
第1号 3

名古屋城調査研究センターの発足にあたって

2019年4月に本センターが発足しました。熊本城・金沢城・姫路城にある調査研究センターと同様の研究施設です。

17人で発足、「特別史跡名古屋城跡」にふさわしいナンバーワンの城郭研究センターを目指します。

私は初代の所長を拝命しました。名古屋市出身で、子供の時から、お城は身近で、天守が再建された時には小学校4年生。その時の絵日記が残っていて、屋根に上がった金の鯨、オス・メスに巻かれていた晒が、順にほどこかれていく様子を書いてあります。文化庁に16年勤務し、「名古屋城跡」も担当しました。

センターでは、まずは資料整理を進めます。センターがなかったため、名古屋城に関する基礎資料が未整理です。資料はいずれかの段階で市民に

も使いやすいように、公開していく必要があります。研究成果は順次報告します。研究紀要第1号も刊行いたしました。今後もご期待ください。

名古屋城天守は戦争のために燃えてしまいました。天守が崩れ落ちるところを、知人も見えています。高さは首里城正殿の二倍でした。

河村たかし市長のもと、木造天守が焼失前の精緻な実測図、写真どおりに復元されます。天守の中には驚くような仕掛けがさまざまにあり、復元の暁には目にできます。いくつかの城には人柱伝説があります。その人柱に自分がなりたいという気持ちはどこかにあります。

ポーランドのワルシャワ市街やロシアのエカテリーナ宮殿のように戦争で壊されたけれど、旧状通りに復元されたものがあって、世界遺産です。いつの日にか、焼失前の姿に戻った名古屋城が、世界遺産に登録されると信じます。



服部 英雄

名古屋城調査研究センター所長

愛知県名古屋市生まれ。博士(文学)
東京大学文学部助手
文化庁文化財保護部記念物課調査官
九州大学大学院比較社会文化研究科教授
などを歴任。
現在は、くまもと文学・歴史館館長
九州大学名誉教授
2019年より名古屋城調査研究センター所長を兼務。

名古屋城の石垣を知るために その1

名古屋城の石垣は、本丸・二之丸・西之丸・御深井丸を中心として築かれており、三之丸を含む城全体での総延長は約 8.2km です。高さは、天守台以外の部分が 5～13m、天守台東側が約 12.5m、西側と北側で約 20m です。総面積は、推定で 5 万㎡に及びます。

名古屋城の石垣普請（石垣工事） 名古屋城の石垣は、徳川家康の命令の下、西国を中心とした 20 大名による割普請（天下普請）によって築られました。石垣を含む普請（土木工事）は、慶長 15 年（1610）6 月 3 日より根石置きが始まり、8 月には加藤清正が天守台の石垣を完成させ、9 月には本丸・二之丸・西之丸・御深井丸の石垣がおおよそ完成したと伝えられます。

石垣の調べ方 名古屋城の石垣は、築城以来幾度かの地震、戦災、そして長い年月の経過による石垣の劣化や修理などに伴う積み替えなどの変遷が所々見受けられます。そこで、城内の石垣を末永く保存していくため、石垣の「健康状態」を的確に診断することが、石垣の調査・研究を行うためにも重要です。全国各地の石垣を持つ城郭でも同様の試みが行われており、その調査を人間の「健康診断」に例え、その結果は一般的に「石垣カルテ」と呼ばれています。名古屋城でも、石垣の積み方をはじめ、石材種類・刻印・墨書・矢穴の有無などの基本情報を確認することからはじめています。

名古屋城の石垣につかわれた石材 名古屋城の立地する名古屋台地周辺では、石垣の材料になる岩盤・岩脈がありません。近くても直線距離で 15km の小牧市岩崎山、多くは直線距離で半径 50km 前後の石材産地から、運ばれてきています。名古屋城築城期における石材は、小牧市岩崎山・瀬戸市方面の花崗岩、篠島をはじめ三河湾沿岸で産出する花崗閃緑岩、岐阜県揖斐川沿岸の多度山系などの砂岩が中心とされています。いずれの石も同様に硬いため、堅牢な石垣を築くことが可能になりました。また、姫路の池田家や和歌山の浅野家のように、遠く離れた自領からはるばる石材を運び、石垣の一部に積み上げた大名もいます。

「刻印」・「墨書」と「矢穴」 石垣に使われている石には様々な印が刻まれています。これらの印は、刻印または刻紋と呼ばれ、石垣を築くことを命じられた諸大名の職人が、自分たちが使う石を他大名の石と区別するために刻んだ合印の意味があったと考えられています。また、石を割る際に刻まれた矢穴も多く残されています。

（学芸員 木村有作）

